



日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<http://www.niccho.com/> email: jimu@niccho.com

自己実現の場を求めて



—第 48 回日本彫刻会展覧会「開会式」の様子—

理事長就任のご挨拶

日本彫刻会理事長 神戸峰男



公募展団体の活性化が課題とされてから久しくなります。私どもの日彫会におきましても展覧会来場者数、会員数、若い出品者の減少がみられます。そのため、今年の第四十八回展では、活気ある展覧会開催のため、開会式の復活、全出品者を対象とした作品研究会の実施や新たな賞の増設を試みました。また、社会貢献のひとつとして長く取組んできた視覚障がいの方々を対象とした触れる鑑賞教室は、過去最も多くなり充実してまいりました。

芸術は時代とともに、社会のありようとともに変貌していくことは長い歴史をみてもあきらかですが、突き詰めると作家個人個人の「自己実現としての作品」にかわりはありません。その上で「彫刻とは何か」・「造形とは何か」という根本的な追求をまっすぐに語れる気風を守り、また、会員一人ひとりの活躍の場の拡大を図ることが私ども日彫会の大切な使命であると考えています。

平成二十八・二十九年度に引続き二期目の就任となりますが、二年後の記念展となります第五十回日本彫刻会展覧会に向け、先人たちの功績をふまえ、会全体を盛り上げ活気ある公募団体としての在り様を示してまいります。理事長という役職を引続きお受けするにあたり、大変身が引き締まる思いです。新たな展開を見据え充実した二年になりますよう山田朝彦委員長を始めとする会務委員諸氏とともに尽力いたす所存です。今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます、理事長就任の挨拶いたします。

委員長就任のご挨拶

日本彫刻会委員長 山田朝彦



この度、理事会において委員長の大役を仰せつかりました。非力ではありますが理事長の神戸峰男先生のご指導のもと、新会務委員と共に職責を果して参りたいと存じます。

公益社団法人としての日本彫刻会は現在いくつかの問題に直面しております。正に時代と共に歩んでいく事が求められているように思われます。

伝統を守りながらも新たななる挑戦をする活気ある作家集団としての日本彫刻会を目指し、少しでもお役に立てるよう力を尽して参る所存です。

皆様のご支援とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成30年度 日本彫刻会総会

第89回通常総会報告

平成30年1月13日（土）午後2時から日展会館において第89回通常総会が開催されました。

出席者 正会員 187名（内委任状137名）

定款17条の定めるところにより総会成立

議事

第1号議案 平成29年度事業報告承認の件
第2号議案 平成29年度決算報告承認の件・

監査報告

第3号議案 第48回日本彫刻会展覧会開催に関する件

第4号議案 定款変更の件

第5号議案 会員状況承認の件

第6号議案 役員改選の件

全議案とも異なく承認されました。

報告

- 1 平成30年度事業計画の報告
- 2 平成30年度予算の報告
- 3 役員辞任の報告
- 4 委員改選の報告
- 5 新運営委員および新無審査会員の報告
- 6 第48回日彫展審査員の報告
- 7 第48回日彫展会友推挙選考委員の報告
- 8 日本彫刻会新鋭選抜展および俊英作家小品展準備状況の報告
- 9 その他の報告

第48回日本彫刻会展覧会報告

公益社団法人日本彫刻会は、約70年の歴史を持つ国内最大の彫刻研究団体です。本会は活動の中心事業として、日彫展を開催しております。日彫展では彫刻作品の展示のほかに、彫刻研究会、ギャラリートーク、彫刻に触れる鑑賞支援活動を通して、芸術文化の振興と社会への貢献に努めています。

また、今回から開会式および、テーブルカットを執り行った他、会員賞を新たに創設し展覧会の活性化を図りました。

そのほか、本会は地方日彫展・各種選抜展などを開催しております。第48回日彫展の詳細は以下の通りです。

①会期 平成30年4月19日（木）～5月2日（水）

②会場 東京都美術館 ギャラリーA・B・C

（東京都台東区上野公園8―36）

③陳列点数 295点

〈内訳〉

正会員 233点

会友 38点

無鑑査（一般応募） 3点

鑑査（一般応募） 31点

④審査員

審査員長 神戸峰男

山田朝彦 川崎普照 蛭田二郎

青山三郎 九後稔 高橋勇

谷口淳一 堀内秀雄 山下清

小宮山美貴 紺谷武 鈴木紹陶武

東誠 森矢真人

（以上15名）



会場風景 ギャラリー C



会場風景 ギャラリー A

⑤会友推挙選考委員

高橋勇 青山三郎 谷口淳一
堀内秀雄 (以上4名)

⑥受賞者

西望賞 梶川俊一郎 宮坂慎司
会員賞 廣川政和 浮森夕菜
日彫賞 松井みどり 宮本温子
優秀賞 境野里香 重政信明
田村晴江 秋田美鈴 城谷なるみ
新人賞 上床利秋 柴田茜 田原迫華
毛受卓也 山内雄奨

⑦会友推挙・正会員推挙

会友推挙 岩館由美子 及川学 志村真惟
田原迫華 服部真知 早野路
最上健 (以上7名)
正会員推挙 秋田美鈴 浮森夕菜 上床利秋
太田望 大竹和子 加藤真浩
重松濤 高野直幸 中山邦彦
西川好枝 西村幸一郎 平杉容子
細川大潤 宮本温子 山口左知代
若海唯賀 (以上16名)

⑧入場者数 10,591名

(内訳)

一般 136名
大学生 21名
企画展協賛 2,408名
招待状 5,243名
招待券 572名
出品者 1,217名
障がい者手帳をお持ちの方 208名
付添者 88名
日本美術家連盟他 63名
65歳以上、高校生以下 635名

⑨彫刻研究会

4月21日(土)・22日(日)
授賞作品および希望者の作品批評、研究会を実施しました。

参加者 約190名

⑩彫刻鑑賞解説会(ギャラリートーク)

期間中毎日(4月21日と最終日を除く)

参加者 約150名

⑪彫刻に触れる鑑賞支援活動

a、視覚に障がいがある方のタッチツアー
希望者の申し込みにより実施しました。
参加者 約23名(うち付添12名)

b、盲学校鑑賞教室

4月25日(水) 東京都立葛飾盲学校 (中学生8名、教員6名)

4月26日(木) 東京都立久我山青光学園 (中学生27名、教員18名)

4月27日(金) 東京都立久我山青光学園 (小学生30名、教員17名)

筑波大学附属視覚特別支援学校 (小学生17名、教員6名)

(高校生17名、教員6名)

5月1日(火) 筑波大学附属視覚特別支援学校 (小学生8名、教員4名)

⑫表彰式及びオープニングパーティ

日時 平成30年4月21日(土)

午後5時より

会場 東天紅 上野店 3階 鳳凰

(東京都台東区池之端一―四―一)



表彰式の様子

◇受賞者の声

■西望賞

「地平」

梶川俊一郎



アフリカの草原、地平線を見つめる伝統衣装に身を包んだ女性の写真を見た。荒野に生きる彼女にとって死が訪れるその時まで、ただひた向きに生の証を刻む。自分はその姿を遺したいと思います。今、自分に出来るうる瓦焼きという素材で、想いを内包する匣として。

■会員賞

「魔法の木」

廣川政和



モデルは自分の娘である。木は父である私である。娘の空想の中で、木はあたかも魔法のように、椅子やロバやミミズクになったりと形を変える。想像することから、主なモチーフやテーマが決まり、造形化が始まります。タツチツアアでは、触覚で魔法の世界を楽しんでもらえればと思っています。

■会員賞

「Lutsemi - 実 -」

宮坂慎司



遺跡からの出土品のような、人間の痕跡を表す作品をつくりたいと考えている。作品の表層は人間の肌ではなく、存在感の表層であるという意識のもとに制作に臨んだ。素材感と形態感が互いに影響を及ぼすモルタルの直付けの在り方を模索し、形が堆積することで成る張りのある量感と風化していく脆さが混在する姿を表現した。

■日彫賞

「舞う」

松井みどり



人の死に直面することの多い年であった。「死と生・舞う」をテーマに制作した。死は、腐食し錆び付き白骨化する。焦げ茶色に腐食した大地から、解き放たれた若い肉体が躍動的に、生命を吹き返す。指に巻いたテープが、生命ある様に螺旋を描く。女性の顔が、生き生きと輝き、生の歓喜を舞う。(胡粉の白、鉄の腐食に工夫した。)

■日彫賞

「あめあがり」

浮森夕葉



この度の作品は全体の量の流れを意識して制作しようと思いました。私は大まかな全体像を考えた後に、実際に友人にポーズをとってもらいながら、細かい部分を詰めていきます。そこからマケットをつくり構成を整理します。制作の途中で行き詰まったときには、そうしたプロセスが元の軸へ戻してくれるように思います。

■日彫賞

「菊」

宮本温子



ご縁あって自身の造形観や塑造観が変化したきっかけとなった女性を久しぶりに制作し、個々のかたち、かたちとかたちの繋がりがより強く生命感を持つよう土付けそして石膏直付けを行いました。これまでの積み重ねを感じながら、そして同時に新たな気持ちで取り組んだ本作品が、このような名誉ある賞を頂けたこと、大変ありがたく、これから励みにして精進して参ります。

■優秀賞

「夢はまほつつかい」

境野里香



自分が可愛く見えるよう考えた、「まほつつかい」のポーズ。その姿を見つめる猫。その姿が微笑ましく作品にしてみました。まっすぐに伸ばした手足と、前に突き出たお腹がおもしろい形だと思いました。モデルのポーズは安定しないし、大人とは違うバランスが、苦心した点です。

■優秀賞

「渚」
重政信明



ここ数年、大地に立ち存在感のある彫刻を作りたいと考えて製作してきました。今回も若い女性像でそれを表現しようとしたが思い通りにいかず、反省することが多々あります。

この度、思いがけず賞を頂き身に余る光栄です。感謝でいっぱいです。これからも今まで以上に精進し制作に励みたいと思います。

■優秀賞

「Spring 2018」
田村晴江



今回の作品は、誰もが見慣れた何気ないポーズを彫刻作品にするためには、どうすれば上手く表現できるかと考えて制作しました。

体軀はソフトに、キャミソールは粗いタッチで仕上げることで作品に変化を持たせ、私の春色に仕上げました。

いただきました賞を励みに、今後とも精進して参る所存です。

■新人賞

「賢者ケイロン」
上床利秋
(新入選)



ケンタウロス族の賢者ケイロンは、
医療、音楽に秀でており、平穩を好む。(ギリシヤ神話より)

霧島山麓に佇むケイロンが、人々の願いである新燃岳噴火収束の気持ちを矢に込めて、火口に向けて弓を射ている場面をイメージして制作しました。

■新人賞

「Waterfall」
田原迫華



小柄だけれども、非常に手の長いモデルさんで、仏像のようだと思います。少し不思議な造形を目指しました。

ある時から、流れ落ちる瀧のイメージが重なり、水が上から下へ落する如く、自然の摂理に則ったかたちを求めると同時に、上昇する感じを強調しました。

■優秀賞

「明日はよくなる」
城谷なるみ



調子を崩して夜制作できなくて、歯がゆい毎日。そんな中、最近ご主人を病気で亡くした親友と話す機会があった。入退院が重なり病状が徐々に重くなっても、「きつと治る」と、真摯にリハビリに取り組んでおられたご主人の様子をうかがって胸を打たれた。苦しさの中で光を探す、涙を拭く少し前のような形をイメージした。

■優秀賞

「風はどこから」
秋田美鈴



恩師である上田久利先生の「風の音」シリーズから着想しました。先生の作品と相対化する中で、自分のこれまでとこれからについて考えてみたかったからです。

遠くからする大きな音に耳をすますポーズは、新たな出会いや出来事に対する予感を意図しています。量感の豊かさを強調し、未来にときめく気持ちを込めました。

■新人賞

「カドリーユ」
柴田茜



子供の頃、習っていたバレエのレッスンに行くのが楽しみでした。共に練習して励んだ友人が今でもバレエを続けていることを知り、当時を思い浮かべ、バレリーナをモチーフに選びました。

制作過程では、バレリーナの優美な姿の裏にある力強さを表したいと思いい、作品に芯を通すことを心がけました。

■新人賞

「後の先」
毛受卓也



今回の作品は、宮本武蔵をイメージして制作しています。後の先という言葉は剣術用語です。相手が先手で仕掛けた技に対して、後手で迎撃つ様子を表しています。じつと動かずに構えているのではなく、次の動作を感じさせられるような足の重心位置、身体の傾きを考えることに苦労しました。

■新入賞

「呻吟する男―青年F―」
山内雄奨（新入選）



呻吟（しんぎん）とは、病もしくは創作上における苦しみを呻（うめ）くことを表す言葉です。同年齢の友人がある病に侵され苦しんでいる事実に直面し、ショックを受けたと同時に自身の創作することでの苦しみが、野暮ったさのある匿名的なひとつの男性像を作り出すきっかけとなりました。

◇新入選の喜びの声

■新入選

「あたらしい日」

池澤優子



今回出展した「あたらしい日」は、私が初めて作った等身像です。自分より少し大きいくらい的人物像を作ることは試行錯誤の連続でした。やっと作品に軸が通り、しっかりと足で立っていることが感じられたときはたいへん嬉しかったです。今後はより説得力のある人体表現を目指したいと考えています。

■新入選

「回想」

梶川嘉雄



今回の入選を足掛かりに更なるステップアップを目指して、精進して頑張りたいと思います。今まで、良い作品を作ろうとの意識が強すぎ、かえって作品全体が不調和になり見苦しい作品となっていた気がします。今回は少しその点を意識、少し丁寧に取り組んだつもりです。作品はモデルさんが幼い頃バレエを習っておられ、その時の基本ポーズの一つを思い出してとっていただいたもので、それで回想という題としました。

■新入選

「優」

加藤萌恵



初めての入選に喜びと驚きの気持ちを感じています。これもひとえにお世話になった先生方や先輩方のおかげです、誠にありがとうございます。私は大学に入学し、初めて彫刻の世界に触れました。まだまだ未熟ですがこれからも勉強していきたいです。

■新入選

「練習の合間」

加藤史郎



木像彫刻を始めて1年未満で、本作が2作目です。憧れの日彫展に入選出来て大変光栄に思っています。これまでは趣味で帆船構造模型や家具などを作ってきました。彫刻はモデルを観察し、自分の感性で作る自由度が楽しい。大きな物を作る場所が無いので、寄木造の群像にしました。

■新入選

「空」

紀平佳代



制作場所じや押入れ上段。薄暗い押入れで心が曇ることもありました。そんな時、押入れから覗く空に心救われたものです。今年はずっと空を構え、大きな作品への挑戦も始まります。自分の未熟さに負けず、制作に向き合いたいと思います。

■新入選

「化身」

小寺美樹



これまで絵をかじっていました。粘土作業をはじめた時、懐かしい大きな喜びを感じたものの石膏取りは並大抵な苦勞ではありませんでした。それでも彫刻は魅力があり逆に私を鍛えてくれました。「化身」は滅びる肉体（下）永遠の霊（上）を心臓（中）で絆ぐのをイメージしました。仕上がりに不満が残りました。次回にっなぎたいです。

■新入選

「友」

四方誉



初めて人の顔を制作する中で徐々に形を決定する過程が苦しくも、今までにない充実感を得ました。特に一つ一つのパーツが特徴的で目には見えない骨格も意識することが必要でした。そこに彫刻の奥深さを感じ、彫刻を通して様々なことを知る良い機会となりました。これからも制作を続け多くのことを学んでいきたいと思いました。

■新入選

「心の声を聴く」

嶋谷悦子



大学時代に彫塑と出会い、卒業後も彫塑を愛好する仲間と共に年に一回だけの制作を細々と続けています。今回初めて日彫展という東京の展覧会に出品させていただき入選できたことは大変大きな喜びとなりました。他の出品作品も鑑賞し刺激を頂きながら、今後自分らしい作品の制作に努めていきたいと思っています。

■新入選

「心にとつ」

黛文雄



入選いただき誠にありがとうございます。製作中は、モデルさんの形を感情ぬきにただ見たままを製作する視点とそこに、感情を込めるという視点で作成しております。出来上がりを見て、製作する技術と感じる心が未熟な点を実感するばかりですが、自分に負けずにトライしてまいります。

■新入選

「友人の顔」

中島大介



今回日彫展に出品するにあたって、初めて土粘土に触れました。土粘土の感触や、自由に形を変えることができる点に強い興味を抱きました。私は現在、小学校の教員を目指しており、将来土粘土を用いた授業を通して、子ども達に粘土の感触や魅力を伝えていきたいと思っています。

■新入選

「おやな」

細谷佳江



私には九人の孫がおります。幼い子は媚びることなく意識もせず、ただそこに居るだけで心が和みます。そんなおきなごのあどけなさを追いかけて制作しました。木彫りを始めて二体目の作品です。鑿や彫刻刀を揃えながらの作品作りでした。自己満足だけかと心配になり貴展に応募しましたが、初入選できてこんなに嬉しいことはありません。本当にありがとうございました。

■新入選

「髪を結う女」

鈴木伽奈



初めて等身大の人物像を制作し、粘土管理や型取りなどその規模の大きさに戸惑いました。しかし同時に一から作り上げていく塑像の魅力を改めて感じ、今度もその魅力を生かした制作をしていこうと思います。

■新入選

「藪」

塚本将慈



ロダンの考える人の力強さに感動し、このような作品が造りたいと芸大に進みました。そして、人体の内にある自然の美しさとそれを感じ表現することがどれほど難しいかを痛感しました。この入選を糧とし、より深く彫刻の表現を追求していく所存です。

■新入選

「ふるさとが聴こえる」

橋本和成



私は福島に住んでいます。7年前からこの土地は変わってしまいました。戻れない人も、帰らない人も、離れられない人も、気にしない人も、考えるのをやめた人もいます。そんな中で私はふるさとを想い立っています。この作品も決して倒れないように立っていたらいいなと想い伝わるようにと制作しました。ありがとうございました。

■新入選

「これから」

町野紗恭



心棒の作りが甘かったため、粗付け段階で上半身の粘土が落ちてしまいました。当初、心も落ち込みましたが、一から作り直すことで、今までの行程を振り返ることができ、物事はとらえようによっては良くも悪くもなることを改めて学びました。

◇ギャラリートーク

鑑賞者の方に彫刻をより身近に感じて頂く為に
 始まりました、出品作家によるギャラリートーク
 ですが、第48回展におきましても、連日多くの鑑
 賞者の方々に彫刻の魅力についてお伝えする事が
 できました。

会場では、受賞作品を中心に、様々な素材、形
 態の作品を、事前に提出頂きました資料をもとに、
 作家ならではの制作秘話や作品に込めた想いなど
 をふまえ、担当の先生方に解説して頂きました。

鑑賞者の方々からは、「FB」とは何の事ですか。」「制
 作にはどのぐらいの時間がかかりますか。」などの
 質問が多くあげられました。また「作家の先生よ
 り直接話が聴けて良かった。」などの感想を頂きま
 した。本来は作品より自由に感じて頂くものでは
 ないが、解説で補足する事で、より深く作品を鑑賞す
 る手助けとなり、彫刻に関心を持って頂く一助と
 なりました。



彫刻研究会の様子

◇日彫友の会の活動

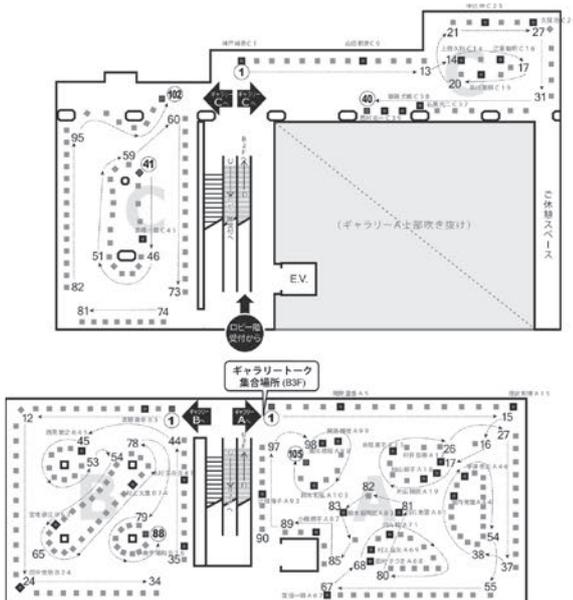
日彫展ですっかりおなじみとなっている「タッ
 チツアー」と「盲学校鑑賞教室」ですが、遡れば
 日本彫刻会の前身である日本彫塑会主催第15回記
 念日彫展（昭和42年）までその歴史を辿ることが
 できます。始まりから数えれば、触れる彫刻鑑賞
 支援の歴史は実に半世紀に達することになります。

こうした彫刻鑑賞支援の精神は引き継がれ、平
 成18年には「触れる彫刻鑑賞プロジェクト」が立
 ち上がりました。このプロジェクトでは、日彫展
 の開催に際して鑑賞支援にあたる会員・会友がメ
 ンバーとして集い、視覚障がいの方々に向けた彫
 刻鑑賞を実践しながら、その在り方を模索してい
 きました。その中で、作家集団である日本彫刻会
 の外から、鑑賞作品の選定や解説文の作成などに
 ついて協力と助言をくださった方々もいました。
 その方々とも活動を共にしたいという思いを受け
 て、平成26年1月に発足したのが「日彫友の会」
 です。

近年の日彫展では、搬入を終えて陳列の準備に
 さしかかる頃に、本会鑑賞支援部と日彫友の会の

青松利明氏（筑波大学附属視覚特別支援学校教諭）
 や半田こづえ氏（明治学院大学非常勤講師）らが
 中心となりタッチツアーと盲学校鑑賞教室の準備
 が進められています。第48回日彫展でも、23名の
 タッチツアー参加者と、5校の児童・生徒約90名
 に彫刻鑑賞を楽しんでもらうことができました。

日本彫刻会による日彫展も2020年に第50回
 を迎えます。これまでの経験の蓄積と理念を堅持
 しつつも、視覚障がい者の方々のための触れる彫
 刻鑑賞がより一般的に認められ、より多くの方々
 に鑑賞を楽しんでもらうためにも、日彫友の会は
 第50回記念展に向けて活動の拡充を目指してまい
 ります。皆様のさらなるご理解とご協力をよろし
 くお願いいたします。



触れても良い彫刻マップ

◇第48回日彫北陸展

会期 平成30年5月16日(水)

5月20日(日)

会場

富山市民プラザギャラリーA・B・C

陳列点数

97点(うち巡回作品72点)

入場者数

1,350人

北陸日彫会賞

「夢のせて」

青山三郎

富山新聞社社長賞

「Sunlight」

川田良樹

5月15日(火)午後4時、理事長の神戸峰男先生、東海日彫会会長山本眞輔先生、共催の富山新聞社小川哲哉代表や来賓の出席を得て開会式が行なわれました。開会式のあと、神戸先生と山本先生による講習会があり、制作にあたっては作品の背景や制作の意図を明確にすること、また作品の構成や



日彫北陸展開会式テープカットの様子



「親子ふれあい彫刻教室」制作風景



「親子ふれあい彫刻教室」集合写真

フォルムのあり方を考慮することなどのご指導をいただき有意義な時間を持つことができました。富山市民プラザギャラリーは、展示スペースがL字型の3室に仕切られているため毎回展示には苦労していますが、今回はオーソドックスな展示方法で動線がはっきりしていたため、作品の大小の変化、着色された作品の色の移り変わりなどを楽しみながら鑑賞ができる会場になったと思います。

会期中に開催したワークショップ「親子ふれあい彫刻教室」は、19名の親子の参加があり和やかな雰囲気で作りが始まりました。制作は、軽量樹脂粘土をアルミ線の骨組みに付けて完成させるもので、鳥や熊の動物、フィギュアや人物像などそれぞれ個性豊かな作品となり、大人も子供も無心になって粘土に取り組んだ1時間半であったと思います。特に子供たちの中には、ためらうこともな

くどんどん粘土をつけて大きな塊を作り、押したり引っかいたりしているうちにいつの間にかクマのぬいぐるみに変化していく様子には私たちが驚かされました。

また、デモンストレーションのように作品を作り始めた会員が、だんだん制作に夢中になり、その会員の周りの空気がピリピリとした緊張感に覆われていき、まるでアトリエでの制作風景を見ているような感じになりました。その会員の制作態度が参加者にも伝わったようで、子供たちも真剣に作品を作っている姿が印象に残っています。この会員の制作姿勢は、アトリエでの張り詰めた空気の中での制作の現場の一端を参加者に示すことができたのではないかと思います。次回も制作の楽しさと真摯な制作態度を披露しながら彫刻の普及や啓発、魅力や鑑賞の仕方を広めていきたいと考えています。

(北陸日彫会 富山事務局)

◇第48回日彫東海展

会期 平成30年5月29日（火）

6月3日（日）

会場

名古屋市民ギャラリー 矢田

陳列点数

104点（うち巡回作品72点）

入場者数

1,561名

愛知県知事賞 「裸婦」

三枝 優

中日賞

「芽生え」

谷本

伊都子

東海テレビ賞 「蒼風」

田中

宏典



彫刻研究会の様子

毎年利用して来た会場【愛知県美術館】が今年
は修復工事中閉館の為使用できず、代わりに【名
古屋市民ギャラリー矢田】での開催となりました。
何もかもが全く初めての会場での開催でしたが、
会員一同協力し合い無事開催、終了する事ができ
ました。会期中の悪天候（2日間の大雨）と会場
の関係もあり、入場者数は減ったものの、毎回観
に来て下さる多くの方々から好評を得ました。心
配していた上階の大部屋1、下階の中部屋2小部
屋3と別れた展示には、「かえって各部屋で気分が
切り替り、以前より丁寧に鑑賞できた」とか「等
身の作品に今まで以上に迫力を感じた」などと
いうプラスの感想を多く頂きました。また触れる事
のできる作品の十数点を材質の違い等を考慮して、
第一室の受付から見える場所にまとめて展示する
ことで事故や破損の心配にも配慮でき、解説もし
やすく大変喜んで鑑賞して頂きました。



タッチツアーの様子



タッチツアーの様子

初日の彫刻研究会では理事長神戸峰男先生、岡
山から蛭田二郎先生、北陸・九州・大阪と遠方各
地より先生方をお迎えし、東海日彫会会長山本眞
輔先生により受賞作品と出席者の作品を中心に、
解説とアドバイスを時間いっぱい全室で行われま
した。

恒例となりましたタッチツアーも前回同様、第
48回展を心待ちにして参加頂いたアートサークル
（障がい者と健常者で美術を楽しむ団体）の皆様の
希望に合うように、リクエストされた作品の作者
が出席し直接作品を解説する事により、いっそう
の親しみと感動を味わって頂きました。

第48回日彫東海展は、準備から搬出まで全てが
今までと異なり、スタッフには心配事ばかりで反
省点多かったですが大過なく無事終了出来た今、
負と思っていた事がかえって良かったりと、思い
がけない新しい発見を多く得た展覧会でした。

（東海日彫会事務局）

アトリエ訪問 I

◇横山丈樹会員のアトリエ

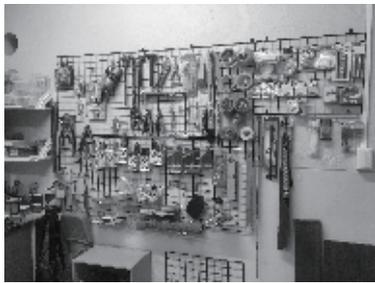
北に日本海を臨み、他三方を北アルプスをはじめとする山々に囲まれ、海山の恵み溢れる富山県。その西に位置する南砺市井波地区は、国指定の伝統的工芸品（木工）である井波彫刻の産地です。

井波彫刻の起源は、この地区にある瑞泉寺が宝暦十三年（一七六三年）に火災で焼失した際、その再建のために派遣された京都本願寺の御用彫刻士が、地元大工らに彫刻技法を教えたことが始まりとされています。それから、社寺彫刻を中心に発展し、現在では獅子頭や曳山、一般住宅の欄間や衝立などの調度品にも、伝統の技が活かされています。そして、今年五月、井波彫刻を今に伝える井波地区は、日本文化遺産にも認定されました。

また、井波彫刻は多くの彫刻家を輩出しており、日彫展には塑造作品を出している横山丈樹さんも、井波彫刻の作り手の一人であります。



井波彫刻（横山さん作）



(上) 井波彫刻の作業場
(下) 壁掛けの道具置き場



アトリエでの様子

横山さんは、祖父も父も井波彫刻の作家だったこともあり、幼い頃から、大きくなったら代を継ぐものだと思っていたそうです。大学で彫刻を学び、卒業後は故郷の井波木彫刻工芸高等職業訓練校で本格的に井波彫刻を学び、現在に至ります。

アトリエは、家屋が密集している地域にありません。二階が住居スペースで、一階にある一室の半分が井波彫刻の作業場で、もう半分が、展示会などに出品する塑造の作業場です。

井波彫刻の作業場には、制作時にすわる座布団の周囲に机が並びます。机の上には制作スペースがあり、その傍らにノミが整然と並べられ、その隣にはノミ研ぎ用具一式が置かれています。壁際の棚の引き出しには、その他の道具が用途ごとにしまわれていて、その上の書棚には、制作時に参考にする本や資料が集められていました。

展示会などに出品する塑造の作業場では、塑造用粘土が、ポリバケツにビニールを敷いた中に入れてあり、硬さ調整してあります。壁掛けの道具置き場には、釘や針金、のこぎりやハンマーなどが、視覚的にも在庫が分かりやすく、すぐ取れるように吊り下げられています。

普段は、朝から夕方六時ごろまで井波彫刻の仕事をし、食事を済ませた夜九時から深夜にかけてが、展示会などに出品する塑造作品の制作時間です。アトリエは町中ですが、近所の方々はもちろん、井波全体が芸術に理解のある方が多いので、深夜の作業であっても、皆さん温かい目で見守ってくれているそうです。

アトリエは、住居、井波彫刻の仕事、塑造作品の制作が一つの場所にまとまっている利点がありつつも、困っている点も多いとのこと。天井まで二メートル三十センチであり、等身大の立像ではギリギリであったり、室内が狭いため、離れて作品全体を見ることが難しかったりするので。そのため、制作板の下に回転機を挟まずに直に移動用の車輪だけにして高さをできるだけ低くすることや、大きめの姿見に作品を映して、遠くから見るとの感覚で作品を吟味することなど、工夫しているとのこと。

最後に、井波彫刻への思いを伺うと、「全国的な認知度をもっと高まり、将来的には小中学校の教科書に載るくらい認知されるよう、多方面でアピールしていきたい。」と抱負を語ってくれました。

アトリエ訪問Ⅱ

◇伊庭靖二・伊庭照実会員のアトリエ

滋賀県草津市は、琵琶湖の南に位置し、東海道と中山道が交わる宿場町（草津宿）として栄えた所です。本会員である伊庭靖二さんと伊庭照実さんは、ここにアトリエを構えておられます。

お二人は、滋賀大学に同期で入学し、彫刻の勉強をされたそうです。在学中、先輩方が卒業後も彫刻を続けておられる姿を見て、お二人も彫刻を続ける決意をされたそうです。卒業後しばらくしてから建てられたのが、現在のアトリエです。建てる前には、大工さんと一緒に先輩のアトリエを見学し、参考にされたとのこと。

アトリエは、住宅地の中ですが、緑地公園に面する袋小路の土地のため、周りを気にせず制作できる環境です。敷地内にはアトリエの他に、住宅や作品保管の建物などがあります。



上：アトリエ外観 下：作品保管場所



アトリエ内の共同制作場

アトリエの玄関を上がると、右手に手洗いがあり、その先が約二十畳の制作スペースです。制作場の右奥には水場やコンロ、冷蔵庫があり、左奥には、粘土槽があります。そして、水場や粘土槽の上に、小型の作品保管の棚が設けられています。粘土槽は、腰の高さほどまでコンクリートで作っており、蓋は木製です。この粘土槽の上に立つても、小型の作品の棚板に頭がぶつからず、かつ、ちやうど等身大人体立像の粘土抜きをする際に良い高さになるよう、型どりを想定して作ったとのことです。

制作スペースの中央にはモデル台があり、左壁に寄せる形でそれぞれ使用中の制作台が並んでいます。筆者が訪問した時には、靖二さんの等身大制作台が二台、照実さんの等身大制作台が一台と小品制作台が一台並んでいました。制作台はキャスターで移動して、制作時は中央を広く使えるようにしているそうです。



制作の様子

お二人ともに、中学校の教員であるため、主に制作は土日です。水着のモデルをそれぞれ使って制作するため、モデルによる制作の時間帯は分かれています。共同アトリエであるため、掃除や片付けには気をつけておられるそうです。このことが、窮屈というよりも、利点が多いとのこと。モデルに対する礼儀としてきれいな環境を維持することにもなり、また、自宅としてのリラクゼーションイメージよりも、アトリエとしての緊張感にもつながるそうです。

ともに彫刻家である利点の一つは、型どりを手伝い合える点です。ただし、互いに出品時期が重なるため、どちらの型どりを先にするか調整が必要で、また、作品についての批評を交わすことができるという利点もあります。客観的かつ専門的な視点が身近にあることは、良い助けになるそうです。ただ、言われたことをすべて受け入れるのではなく、自分が納得できる意見だけを取り入れるとのこと。

まさに切磋琢磨できる環境を、自らつくられたのだと感じる、アトリエ訪問でした。

明治維新を彫刻で巡る

鹿児島編

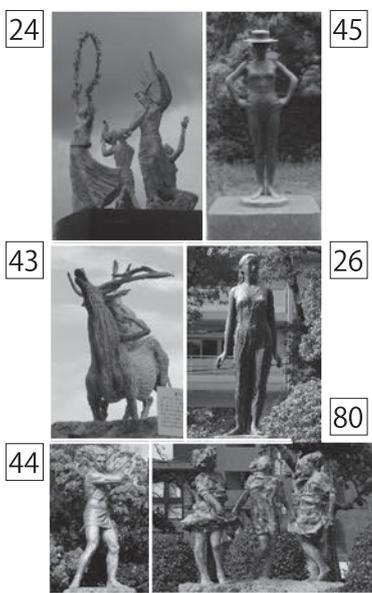
今年、平成三十年は、明治元年（1868年）から数えて150年目に当たります。全国各地で明治維新150年を記念した行事が開催されています。鹿児島においても大河ドラマ放映や明治維新150周年記念行事もあり、国内外からの観光客が日に日に賑わいを見せています。鹿児島は皆さんご存知のとおり、明治維新の原動力となった人材を多数輩出しましたが、日本最後の内戦といわれる西南戦争（1877年）で敵味方に別れて戦い、多くの人材を失いました。時代をさかのぼれば、鑑真、鉄砲、ザビエルと大陸から海を渡ってくる文化を受け入れてきました。また、1865年には薩摩藩独自で留学生を欧州に送り出し、67年、パリでの博覧会において薩摩藩は江戸幕府と並んで出展をしています。西欧の文化を積極的に取り入れようともしました。このような歴史風土をもった鹿児島市内には、多くの彫刻があります。そこで明治維新に関連する彫刻を中心に紹介してみましよう。

鹿児島へは、飛行機、新幹線、高速道いずれを利用しても鹿児島中央駅が受け入れの窓口となります。この鹿児島中央駅東口には、薩摩藩が英国に送った16名の留學生の像《若き薩摩の群像》（中村晋也作）が聳え立っています。（A）初代文部大臣の森有礼アメリカでワイン王になった長沢鼎、大阪商工會議所を開設した五代友厚などが留学当時の容姿で表されています。

中央駅から天文館（江戸時代、藩の天文関係の機関のあった場所。現在は市内随一の歓楽街）に向かうと、高見橋があります。この付近には、西郷大久保らの生家があったとされます。橋の袂には《大久保利通公像》（中村晋也作）（B）、橋の欄干中央部には、《母と子供の群像》の母像（楠元香代子作）（C）、対面には子どもが遊ぶ様子を表した群像があります。（鹿児島大学彫塑研究室作）（D）

下流の武之橋には《松方正義像》（E）、《乃木希典の妻・静子像》（F）があります。高見橋よりさらに天文館に向かって歩いていくと、維新にまつわる人物を形づくって歴史を紹介したアルミ製の像が数点見られます。天文館には《五代友厚像》（坂上政克作）（G）があり、宝山ホール前には島津家老の《小松帯刀像》（西俣敏弘作）（H）、道を挟んだ市立美術館前に《西郷隆盛公像》（安藤照作）（I）、近くの照国神社には《島津斉彬像》（朝倉文夫作）（J）、県歴史資料館黎明館庭には《天璋院篤姫像》（中村晋也作）（K）があります。

西南戦争の銃痕跡が残る石垣にそって北上すると、かつて家老などが住んだ上町地区に出ます。



左手には西郷隆盛ら薩軍を祀る南州神社、ザビエルと忍室和尚が会見した福昌寺跡、右手祇園の洲には、ザビエル上陸記念の地があります。さらに、北上すると、西南戦争官軍を祀る祇園の洲公園内に《西南の役官軍戦没者慰霊塔》（中村晋也作）（L）、山手の多賀山公園内に《東郷平八郎像》（M）があります。さらに北上すると25年前まで実際に市内で使われ、93年の大水害によって移築された石橋を保存している石橋公園や世界遺産登録された集成館などがご覧になれます。また、鹿児島市内ではその他多くの彫刻が見られます。次ページをご覧ください。

（ ）内アルファベット数字は設置場所を示します。

◇第11回日本彫刻会新鋭選抜展

会期 7月8日(日)～7月21日(土)

場所 ギャラリー青羅

(東京都中央区銀座3-10-19 美術家会館1階)

本会に所属する若手作家22名の作品が並び、初日には、作品を語る会が開かれました。会には諸先生方をはじめ、出版社の方や一般来場の多くの方にご参会いただきました。会のはじめでは山田朝彦委員長よりお話があり、この会場でフアッチーニやグレコを含め名立たる彫刻家も展示したことを伺い、出品者一同ここで発表できることの重みと有難さを感じました。

その後は、各出品者による作品解説があり、それに対してご参会の方からお言葉を頂くという形式で進みました。出品者からは、着想に至った経緯、造形の意図、制作時の葛藤などに加え、日々の制作の悩みや今後の抱負など、作家としての自覚と彫刻への思いを聞くことができました。ご参会の諸先生方からは、ポーズの選択や量の配分などの造形に関するご指導や、着想において経験や実感を伴うことの重要性など表現の根本に関するご指摘がありました。また、出品者同士での意見交換もあり、ライバルであり応援しているからこそ思うことなどが交わされる様子も見られました。

締めのご挨拶では、山田委員長より、各出品作家が新たな試みをしていることに対するお褒めの言葉と、今後新たな芽を生み出して欲しいという期待と、是非本展でも新しい方向に進むための挑戦をして欲しいという激励を頂き閉会となりました。



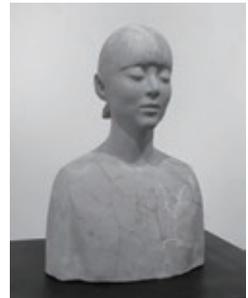
「雲の社」
永江 智尚



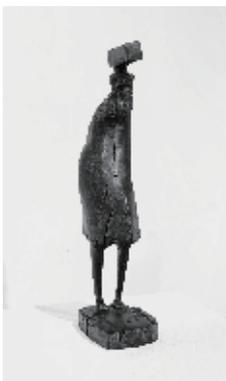
「ご主人の帽子」
白石 恵里



「常夜の軀Ⅱ」
坂本 健



「夏の庭」
加山 総子



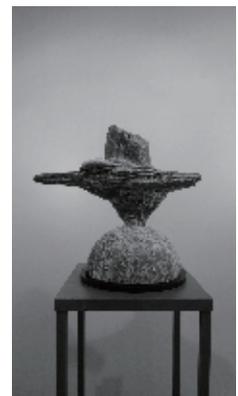
「な～に見てんだよ」
山本 将之



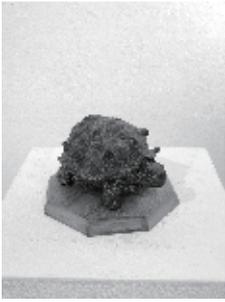
「つぼみ」
森田 一成



「singing shell」
宮坂 慎司



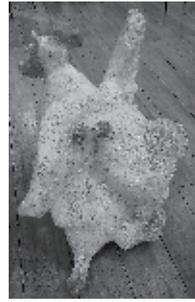
「蜃気楼」
長谷川 倫子



「鬼面甲」
武本 大志



「双 ~かくのだて踊り子~」
佐藤 励



「おしくらまんじゅう」
小橋 暁子



「待ち合い」
市村 成保



「渚」
秋田 美鈴



「恩送り」
八塚 由紀子



「maternity」
三政 洋一



「育」
田村 さつき



「Anthony」
加藤 真浩



「優しさ」
太田 望



「やまないあめ」
浮森 夕菜



「親子」
芦田 風馬



「太陽はわたしの味方」
宮本 温子



「帽子をかぶった子」
高野 直幸

慶 事

常務理事 雨宮 敬子 先生

文化功労者 顕彰

平成 29年 11月

正会員 池川 直 先生

平成 29年 10月

改組 新第4回日展

文部科学大臣賞受賞

◇2018年

日本彫刻会俊英作家小品展

「机上の美」

会期 7月11日(水)～7月17日(火)

会場 日本橋三越本店本館6階アートスクエア

(東京都中央区日本橋室町1-4-1)

出品者

石崎 義弘	緒方 信行	川崎 義昭	河村 佳則
大丸 敏	高倉 準一	田中 厚好	田畑 功
田丸 稔	寺山 三佳	中辻 伸	中原 篤徳
野村 光雄	堀龍太郎	堀内 有子	間島 博徳
南川 憲生	山田 進	吉居 寛子	阿部 鉄太郎
伊庭 照実	上田 ふみ	岡本 和弘	小関 良太
梶川 俊一郎	神谷 睦代	桑原 秀栄	元田 木山
小西 徳泉	鈴木 紹陶武	高野 眞吾	徳安 和博
東 誠	廣川 政和	二塚 佳永子	前芝 武史
森 矢真人	安田 陽子	横山 丈樹	井倉 順洸
岡田 賢三	木村 玉舟		

賛助出品者

中村 晋也	神戸 峰男	橋本 堅太郎
川崎 普照	能島 征二	山本 眞輔
		山田 朝彦

(順不同・敬称略・計49名)



展示風景 (エレベーター前)



展示風景 (中央カウンター)

日本橋三越本店で定期開催しております「日本彫刻会選抜展」を本年は、若手中堅作家を中心に、賛助出品者を合わせ、展覧会名を「日本彫刻会俊英作家小品展」とし、副題を「机上の美」と定め、49名の作品を展覧致しました。彫刻がオフィシャルの場だけのものではなく、書斎やリビングなど人々に寄り添い、愛される「美」の日常化を試みた展示となりました。

また、14日には、ギャラリートークが開催され、諸先生方をはじめ、出版社の方や一般来場の多くの方々にご参会いただきました。廣川政和先生の司会進行で、各作家より、作品の意図や材質、苦勞話など各人割り当ての3分を超える語りに、彫刻に対する情熱が感じられ、一般来場の方々におかれましても、彫刻への理解や鑑賞が深まる一助となったと確信しております。

最後に神戸峰男理事長より「作家がよく勉強していることが分かり、私自身もつと頑張ろうと勇気を頂いた。今後も幅広い表現の作品に大いに期待したい。」とお言葉を賜り閉会となりました。



ギャラリートークの様子

訃報

左記の方が長逝されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

運営委員 佐藤 敬助 先生

平成 29年 12月

賛助会員 赤木石膏像研究所

赤木 喜三郎 様

平成 30年 3月



ギャラリートークの様子

編集後記

◆大阪・島根・長野など各地で頻発する地震、特別警報が出される程の豪雨などの被害に際し、心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧をお祈りいたしております。

◆第48回日彫展では、文部科学副大臣をお迎えしての開会式に始まり、新設の会員賞、2日間にわたる彫刻研究会が初めて行われました。紙面には、新入選者の初々しいコメントが多数寄せられました。

◆7月に中堅若手作家を中心とする展覧会を日本橋三越、銀座ギャラリー青羅で同時期に開催。ギャラリー青羅への出品作品を紙面で紹介いたしました。

◆会報に原稿をお寄せいただきました池川直先生、伊庭靖二・照実先生ご夫妻、横山丈樹先生には、厚くお礼申し上げます。

今号より新委員になりました。2年後の第50回日彫展に向け、会報に対するご意見、ご感想、紹介したい情報、展覧会などございましたら、事務所までご一報頂きたく、お願い申し上げます。

編集委員 川崎 義昭 池川 直 一鍛田 徹

田丸 稔 高野 眞吾 鈴木 紹陶武

永江 智尚 武本 大志

日彫会報 No.77

平成30年8月27日発行